

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成23年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

平成23年6月16日(木)

於：久万高原町町民館

はじめに

今日は、「愛顔あふれる愛媛づくり」ということでお話をさせていただき、また、皆さんから色々な意見をいただく中で、意見交換が出来ればと思っています。2時間ばかりよろしくお願ひします。

今回の「愛顔でトーク」も3回目になりまして、第1回目は、南予の愛南町で、そして、先週は今治市で行いました。南予、東予と来て、そして今日は中予ということで3回目になります。それぞれの地域ごとに、課題であるとか、或いは地域の良さであるとか、逆に、皆さんに教えていただくこともたくさんございまして、大変いい機会になっているところです。今日もどうぞよろしくお願ひいたします。

地方分権について

さて、3月11日に、東日本大震災が発生しました。これは、単に地域の震災に留まらず、ひょっとしたら、今を生きる我々の社会や価値観やものの考え方等、色んなところに大きな変化、変革をもたらすような出来事になっていくのかも知れません。考えて見ますと、この10年、20年で、人々の考え方は大きく変わっていきました。その内の大きな出来事としては、ソ連という国が崩壊した事が第一弾だったと思います。それまでは、イデオロギーとしての社会主義国家と自由主義国家の対立が、当たり前のように皆の気持ちの中に存在していたのが、ソ連という国が崩壊したことによって、こうした価値観の違いによって対立する、或いは見分けたり分断するといったものが解消されるということに至った訳です。それから二つ目の大きな転換期は、バブルの崩壊だと思ひます。戦後世界中が、物が豊かになれば幸せになるのではないかという物質文明を信じて、日本の社会もそれに従って発展を遂げてきた経緯があります。ところが、経済成長を果たして物が溢れるようになってきた。もうかつてとは全然違ひます。私の子どもの頃は、3種の神器は私の前ですが、電気洗濯機、白黒テレビ、冷蔵庫といった時代があつて、次は、3Cで、カー、クーラー、カラーテレビと物が豊かに物が豊かにと追い求めて、ついには、今では、家に車やテレビが2台3台あつたりするのも当たり前になってきた。ところが、物が豊かになればなるほど、失う物もあるということに気がついてきた。それは、人の繋がりであつたり、地域のコミ

ユニケーションであったり、もっと言えば家族の絆であったり、こういったものが崩壊をしていきました。昔、物が無かった時代には、盗られる物がないですから、鍵のある家も少なかったと思います。しかも、隣近所でもらい湯やお味噌の交換やテレビを見合ったり、そういう光景も珍しくありませんでした。しかし、物が豊かになると、人と人が分け合い助け合うということが希薄になり、盗られる物が出てくると家に鍵が付けられ、さらに、物が溢れてくると家の中でも部屋に鍵が付けられ分断が進んでいく。その時に、バブルが崩壊したということです。物の豊かさが本当に人の幸せに繋がっていくのかという価値観に疑問が呈せられて、心の豊かさにこそ本来の幸せの価値があるのではないかと、大きな転換のきっかけになったのがバブルの崩壊でした。そして、今、この東日本大震災を巡って、エネルギーの問題にしる、生き方の問題にしる、まちのあり方にしる、色々な問題が一人ひとりの心に提起されて、恐らくその答えは見えないですが、大きなうねりになって行くことだけは間違いないと思います。そういう中で、これからの時代を切り開いて行かなければならないのですが、地方も、色々な課題を抱えています。こうした世の中の変化も捉えながら、方向性を皆で考え、模索して行かなければならないという訳ですが、ただ一つ言えることは、やはり、それぞれの地域の良さに徹底的に目を向けて、そして磨いていくことが、一つの方向性に繋がって行くということだけは間違いないのではないかと考えています。戦後の日本は、これまで、何もかも国で決めるという体制が出来ました。もちろん戦後の復興から発展して行くためには、限られた資産を全国あまねく社会基盤の整備に活用するという点、これが大目的でありましたから、何もかも国で決めるということは、極めて効率的な姿だった訳です。そして、全国に、道路が出来、上水道が引かれ、公園が出来、全国共通の基盤整備が進められていった訳です。この久万高原町でも、林道の整備、地芳トンネル等が、こうした中で進められてきました。しかし、こうした体制が、もはや限界を迎えてきたのも事実です。これには、色々な背景がありますが、その限界を超えて行くため、その向こう側に行くために、地方分権が盛んに言われるようになりました。

地方分権は、決してバラ色の話ではありません。厳しい試練なのかもしれません。では、それなのに何故この分権の問題が出てきたのかということを見ると、およそ2つの理由があります。それは、今迄のやり方でやってきたことによって、国の財政が破綻をしたということです。お財布がすっからかんになりました。私がかつて国会に籍をいただいていた15年前に、国の借金の残高は、200兆円を超えるか超えないかくらいでした。当時200兆円を超えてしまったらもう歯止めが効かなくなって、坂道を転げ落ちるようになってしまうから、ここで食い止めるべきだというような議論をしていました。あれから15年の月日が刻まれて、その金額は、予想通りというか予

想以上に膨れ上がって、およそ 900 兆円という金額にまで膨れ上がっています。そして、悲しいことに、恐ろしいことに、この膨らんでしまったものを、どうやれば今後無難に処理出来るのか、着地させることが出来るのか、その答えを持っている役人さんも政治家もこの国には一人もいません。今すぐにたちまち何にも起こっていないから何とかなると。しかし、さすがにこれ以上増やすことだけは止めておこうということが盛んに言われるようになって、溜まってしまったものがどうなるかということを考える余裕は無いけれども、もうこれ以上増やすことがないようにということで、すなわち、何もかも国が決めていたが、もうそんな余裕はないので、これから先は、地方は地方で自分で政策を考えて、自己責任で覚悟を持ってやってください。もう国はすっからかんです。そういう国の財政事情からくる地方分権という流れが一つ出てきました。マイナスの要因です。一方、地方では逆の要因がありました。それまでは、何もかも国が決めていた。例えば、バス停を 10m 動かすにしても、久万高原町から、県の地方局に行って、地方局から本庁に行って、本庁から東京の霞が関に行き、その地方を見たことも聞いたこともないような人が、「はいはい何ですか。」「これこれの地域のバス停を 10m 動かしたいのですが。」「どうしようかなあ。」と鉛筆を舐めて机の上で決めて、OK が出たら、そこからまた県に戻ってきて、県の地方局に戻って、地方局から役場に戻って、交通会社に対し 10m 動かしてよろしい、よろしくない。こんなバカなことが、当たり前のように行われていたんです。何か物を作るにしても、国の補助金がありますから、縦が何m、横が何m、広さはこれくらいでデザインはこうでないと補助金は出しませんと、全国同じようなデザイン・景観のまちが日本中に出来ていき、金太郎あめのまちづくりが進んでいった訳です。ところが、本来その地域地域の魅力の源は、地域に根ざした歴史や伝統であるとか、文化や人、その個性こそがまちの魅力である訳ですが、中央で何もかも決める体制では、その個性がまちづくりに生かせない。その本来の魅力を生かすために、地方に権限や財源を移してくださいという、これは、プラスの意味での地方分権を求める動きが出てきました。同じ時期に出てきたんです。国の財政事情から来るマイナスの要因としての地方分権と、地方の要因としてのまちづくりに起因するプラスの要因としての地方分権が、同じ時期に、不思議なことに理由は全く違うのですが、方向性だけは同じ地方分権というが出てきて、一気にその話が世の中に出始めました。簡単に言うと、国が持っていた権限や財源を地方に移してくださいという話です。ところが数年前、所得税がどんと下がって、住民税が上がった年がありましたが、実は税源を国から地方に移す作業だった訳です。国に直接入る所得税の金額を 10 から 5 に減らし、地方に入る住民税の金額を 5 から 10 に増やす。納める側のトータルは変わらないが、国に入るか地方に入るか、その比率を変えるのがあの年の改正でした。このことによって、国から地方

に2兆4千億円のお金が移されたことになります。ところが一方で、それに見合う形で補助金が削られました。移された金額2兆4千億円と削られた補助金の額が同じなら問題はなかったんですが、どさくさに紛れて、削る方は3兆6千億だったんです。結果、この行為を通じて、国から地方への借金の付け替えが行われたということです。ひとたまりもなく沈んで行ったのが、北海道の夕張市です。このような巧みな作業によって、地方は大変な窮地に追いやられていきました。これを乗り越えるために、取り組まざるを得なくなったのが、市町村合併でした。この合併が凄まじかったんです。合併した所には、アメ玉あげますよ、甘いですよと国から言ってきました。合併しなかった所は、ムチ打ちますよ、痛いですよと、アメとムチが用意された訳です。ところが、アメには癖があり、アメはアメでもちっとも甘くないノンシュガーというやつだったんです。そして、ムチはムチでも鋼の入ったビシビシのやつだったんです。これを前に、各地域の市町村長は、まちを生き残らせるために市町村合併の決断をしました。久万高原町もそうでした。当時全国に、3,300の市町村がありましたが、現在1,800しかありません。1,500人の市町村長が、地域が生き残るために失職をされました。助役さんや教育長さんや幹部を含めるともっと大きな人数になります。議員の皆さんも、まちが生き残るためにお辞めになっていきました。当時、地方議員が6万人全国にいましたが、現在3万8千人にまで減っていますので、2万2千人の議員が、市町村合併を通じて職を失っていました。地方公務員も、この10年間で12%人数が減っています。分権で仕事はどんどん増えました。仕事の増えた地方は、生き残るために、このようなことで切り抜けてきた訳ですが、仕事が減っている国はどうなったか。国家公務員はこの10年で2.6%しか減っていません。国会議員は一人も減っていません。しかも、2年前の選挙では、民主党も、自民党も、国会議員の定数を絶対減らしますと約束したはずです。国会議員の世襲を制限します、地方分権をやりますと両党とも約束しました。しかし、全然出来ていない。こうした事実を私ども地方は真剣に捉え、ものを申していかなければならないと思っています。それが、地方が生き残っていくため、また、地方分権の中でしっかりとした基盤の上に立って物事を進めていくために欠くことの出来ない課題です。もちろん、県と市町村も同じようなことが言えます。あくまでも主になるのは、住民に最も近い所で仕事を行う基礎自治体であり、広域的な問題、例えば、防災やごみ問題や消防とかの課題については、市町村の枠を超えてきますので、それに変わる地方の組織が必要です。これが、今までどおり県が良いのか、道州制が良いのか、或いは大阪なんかやっている広域連合が良いのか、私も答えは見えていません。ただ、間違いなく言えることは、黙ってはいだめだということで、今、愛媛県では、県内の20市町と県で、無駄を一緒になって洗い出して、協力する所は協力し、どちらがやったら良いか明らかなものは、その整

理をしましょうという作業に入っているところです。こうした中、地方の有り様が見えてきました。地方分権は嫌がおうにも進んで行くと思います。進まなければ、この国はもたない。そういう中で、地方分権は、決してバラ色だけの話ではなく、やむを得ざる選択肢の中で進められていく以上は、地方も自らのことはやっていこうという今まで以上の気概や覚悟が迫られるということも間違いない。松山市長時代に、市民の皆さんによく言っていたのですが、もうまちづくりは行政主導では無理なんです。市民が主役、行政が参加という本来の姿を目指していかなければ、生き残っていけないということで、まちづくりについて、地区地区で協議会を作っていたら、計画を自ら考え、実施する主体を作っていたら、その代わりお金をお渡しして、後はその範囲で自由にやってくださいというまちづくりの新しいスタイルをスタートしてチャレンジしている最中です。

愛媛県の特徴について

次に、その中で、愛媛県は、どうなのかということです。もちろん、県内の20市町それぞれに魅力があります。ただ愛媛県の特徴的なことを申しますれば、大きく分けて、東・中・南予と言われていますが、それぞれに全く違うということ。風景も違うし産業、人情も違う。どちらかという東予は会社が多いですから、利というものに敏感なところがあります。これをやったら何がプラスなのか何かマイナスなのか。そういうところを強く感じる時があります。久万高原町の場合は、どちらかという南予気質かなと思いますが、南予は「うちは誰と誰の繋がりがあって、先代は誰々で、あそこの家とはこういう関係があって、だから面倒見ないかんのや。」とか、情というものを感じさせる会話をよくされています。松山は、どちらかという商売のまちなので、物事をあまりはっきり言わない傾向がある感じです。例えば、私は選挙をやる身ですが、東予に行って「立候補しましたのでお願いします。」と言うと、「お前を応援したらどういう風になるんや、プラスは何や、マイナスは何や。」「こうこうこういうことです。」と言うと、「それやったら応援しようわい。」「応援出来んわい。」ということで、利というものを基準にイエス・ノーをはっきりと言ってくれる。南予の方は、「すまんのう、ワシは誰やらと誰やらの繋がりがああるけん、お前は応援出来ん。」或いは「誰その紹介があったけん、あれには世話になったけんやったらうわい。」と。情という観点でイエス・ノーをはっきりと言ってくれる。松山が一番難しく、商売のまちですから、「はい分かっていますよ、頑張ってください。」とまだ名前も言っていないのにそういう答えが返ってくる。不思議だと思いますが、非常に東・中・南予というのは、キャラクターが違うなということも感じます。

そんな中で、東予は産業に着目をしたのですが、東予の中心は物づくりです。四国

中央市の紙・パルプ、新居浜市へ行くと住友発祥の地ですから、化学、鉱山、重機、林業があり、住友関連企業がいっぱいある。西条市に行くと、東京に本社がある大手の企業の工場がいっぱいあります。クラレさんやルネサスさんであるとか、先端産業の企業があります。そして今治市になると造船とタオル。面白いことに、造船にしても、タオルにしても、紙にしても全部日本一なんです。その数字が大きいのでびっくりしました。松山市は人口が52万人ですが、一年間の工業生産高は、平成20年度のデータで、年間約4,500億円(21年度は約3,600億円)でした。四国中央市は人口約10万人ですが、工業生産高は、松山市をはるかに上回っていて約6,800億円(21年度は約6,100億円)です。住友のまち新居浜市が約7,300億円(21年度は約5,500億円)。西条市が約8,500億円(21年度は約6,800億円)。今治市に至っては1兆円を超える(21年度は約9,200億円)というから、驚くべき工業地帯であります。こういう風になっているのかということ、改めて今の仕事をいただいて知りました。ところが、縦割りです。紙は紙、造船は造船、タオルはタオル、技術を持った中小企業がいっぱい居るが、その業界の中での上下の話だけ。これを取っ払って業を越えて結び付けていけば、技術交流を通じて新しい付加価値が生まれてくる可能性が残っています。東予は、物づくりを通じての発展が、一つの目指すべき道だと思いました。もちろん、しまなみ海道の活用は観光面で重要な要素にもなってきます。そして南予は、そういう工場の風景はほとんどありません。久万高原町の林業や農業も含めてですが、第一次産業の宝庫です。しかし、確かに、業として難しい時代ですが、その第一次産業への魅力に多くの人達が注目しているのも事実です。安全安心な食べ物、地産地消を進めよう、或いは本当に新鮮な空気の中で週末を謳歌したい、自然の中で思う存分飛び跳ねたいという人々の要求・欲求。価値観が変わってきていますから、地方に対する注目度が、少し前と比べると格段に上がってきています。

第一次産業について

愛媛で一番多いのは柑橘で、温州みかんは和歌山県に続いて2位ですが、愛媛県は、年間を通して柑橘が採れるように、或いは付加価値の高いものに切り替えるために、中晩柑類、晩柑類へのシフトを意図的に行ってきました。今では12月の紅まどんなや2月のせとか、その後の甘平やカラマンダリンや清見であるとか、今の時期は、愛南町の河内晩柑、愛南ゴールド。紅まどんなは東京で1個1,200円で売られています。愛南ゴールドも1個800円。良いものを作ることが生き残る道だということで、県みかん研究所が「味がよくて」「食べやすく」「作りやすい」という観点から常に研究を進めて、今では、20種類を大幅に超える品揃えを持った柑橘王国としてのポジションになってきている訳です。

もう一つ南予で全国一位なのが養殖魚です。タイ、シマアジ、そして真珠もそうですが、全部1位です。しかし、例えばお寿司屋さんに行くと「親父さんこれ天然。」と皆聞くとお思います。お魚というと天然が良いというのが、皆勝手に考えちゃっている。果たしてそうなのでしょうか。肉はどうでしょうか。肉は、養殖が高級な肉なのです。畜産農家が手塩にかけて育てて、安全安心な餌をやり続けて、工夫を凝らして作り上げた肉、これは養殖以外何ものでもない。肉の世界では、養殖が最高級ブランドになっています。ところが魚は、「養殖はねえ。」「やっぱり天然がええなあ。」と自然に言ってしまう。何故こうなったのか。ずいぶん昔に、養殖業で杜撰な経営が発覚して、ホルマリンの問題とかが全国でニュースになったことがありました。だから養殖は、危ないんじゃないかというのが勝手に刷り込まれてしまっていて、そういう見方になっているのではないかと。でも、これからは違います。今世界では、漁獲制限も当たり前になってきた。それから、天然魚はどういう所を泳いで、どんなものを食べているか分かりません。例えば野菜と同じように、写真が付いていて、この魚は、この親父さんが作ったもの。バーコードをかざすと、飼育履歴が出てくるとか、工夫の余地はいくらでもあって、養殖魚の価値観そのものを変えることによって、飛躍的な成長に繋げる可能性があるのではないのでしょうか。極端な話、愛媛県では「養殖」という言葉は使うのを止めて、養殖というイメージが出来上がってしまっているのに取って代わるような言葉を皆で考えましょう。「飼育魚」というのはイメージがさえないし、今、色々と考えていますが、そんな発想もひょっとしたら発展に繋がっていくのではないかと思う。真珠も日本一です。でも中国の淡水真珠に押され気味というのも事実です。でも高級感が全然違う。真珠というと、昔、皇室が成婚の時に着けると売れるのですが、その後また停滞したりというのがありました。今、真珠にまつわる朝のドラマか何かを仕掛けられないか、そこでブームを起こすといったことを考えています。

第一次産業は、野菜を含めて、昨日やっていることと同じことをやっても結果は変わりません。もちろん良いものを作るのが最大課題ですが、工夫することによって価値が変わってくることが可能性としてあるということ、常に大きく捉えておく必要があると思っています。

この前、久万高原町の県林業研究センターに行ってきました。ヒノキの生産量は、愛媛県が全国1位の高級木材です。県土の70%が森林ということもあり、ヒノキがちょうど時期的に市場にたくさん出ていく時期を迎えます。かつてほど外材との価格差もなくなってきました。恐らく東北では、復興で木材の需要が高まってくるでしょう。県産材をどうブランド化し、流通に乗せていくか、これは久万高原町にとっても大変大きなテーマになってくると思います。私も、こうしたブランド化、県産品のセ

ールスについては積極的に取り組んで行きたいと思っています。私は、かつて商社にいましたので、物を売るのが業でした。ビジネスは、どんな分野においても基本は同じです。良いものを作ることが大前提ですが、第一段階は「こういう物がありますよ。」「こんな物があるんですよ。」と、ビジネスの世界ではこれを「引き合い」と言いますが、それをどう組み立てていくか。第二段階は、「これ良いね。」「これ良いでしょう。」と気持ちが合った時に「契約」ということになります。「契約」が済むと、今度は、それに基づいて物やサービスを「受け渡す」、これが第三段階。「受け渡し」が完了すると精算をしましょうということで「決済」。これが第4段階です。ここで通常は終わりますが、場合によっては、その後の「フォロー」として、問題が起こった場合のクレーム処理というのがあります。どんなビジネスでも基本は全く変わりません。それぞれにしっかりとした戦略が必要ですし、その戦略を組み立てることによって、利益が変わってきます。そんな世界で生きてきた経験を大いに生かして、一緒になって頑張っていきたいと思っています。

東日本大震災の被災地に対する支援について

最後に、東日本大震災の支援について、1点お話をさせていただきます。ああした問題が起きると、全国では色々な支援体制を組むのですが、まず、物の支援があります。物の支援は、今、止まっています。ある程度、物は被災地に集まっていますから。相手の欲しい物をしっかりと受け止めて、そして、それに合った物を送らないと、現地は大混乱になってしまいます。だから、常に、情報を取りながらになりますが、第一段階では、考えるまでもなくそれ用に集めている自治体が持っている物資を送ります。第二段階ではまとめて提供が出来る企業に呼び掛ける。第三段階で、県民の皆さんにこれとこれが必要だと呼び掛ける。そういう風に現地ニーズにあった提供をやりました。しかも今回の特徴は、「愛媛チーム」でやったということ。個々の自治体でやることもあるのですが、愛媛県では、県と20市町が共同チームを構築して行いました。

人の支援、これも段階によって変わってきます。第一段階では、人命救助、消防、或いは警察や緊急の医療チームを送ります。第二段階は、復旧に入ってきますので、避難所の設営とか、精神的なケアが必要になってきますから保健師さん、子ども達の世話をするための養護教諭、こうした人材が必要となってきます。そして第三段階になると復興に入ってきますので、今度は、道路を直そう、下水道を復旧させよう、港湾をやりかえようということで、土木技師の皆さんが必要になってきます。今、大体福島を除いて、この第三段階に入ってきていますが、三ヶ月間で愛媛県の自治体職員は、延べ人数で1,200名が現地入りをしました。久万高原町にも行っていただきまし

た。人の派遣も同じように愛媛チームでやったんです。小さな町は、どこに派遣したら良いのかも分かりません。小さな町も一人なら出せます。保健士さん、消防士さんどうだろう。愛媛チームとして、現地のニーズに合わせて人を送るということを初めて行ってみました。そうすると人口の少ない久万高原町でも、もっと人口の少ない松野町でも上島町でも、被災地支援を経験する職員が生まれてきます。この経験がそれぞれの町に帰った時に、必ず大きな力になると思います。それが、人の支援のポイントでした。そして、受け入れ支援。現在、福島県を中心に、愛媛県に200人位来ていますが、難しいなと思ったのが、「どんどん来てください、いくらでも受け入れます。」と言ったところ、「大変ありがたい話です。でも、皆故郷に戻りたいんです。そのためにも、出来るだけ近くにいたい。ましてや身内がまだ行方不明だから離れられない。それが大方の人たちの心情です。だから、お申し出は大変有り難いけれども、最後の最後をお願いします。」という答えが返ってきました。そこで、他の事もやってみようと考えていた時に、たまたまニュースを見ていたら、津波で壊滅した地域の高校生が出てきて、「何もかもなくなったので、楽しみにしていた修学旅行も諦めました。」という声が聞こえてきました。それを見た瞬間、何かしてあげたい、何か出来ないかとあれこれ考えて導き出したのが「えひめ愛顔の助け合い基金」を作ることでした。これも、県が最初立ち上げて、市長会の皆さんや町村会の皆さんも、それは良いことじゃないか協力しようと、そうやって基金が積み立てられてきました。一般の方からも、今7,000万円ほどの基金が集まっています。それを受けて連休中に福島県、宮城県、岩手県に行って、「知事、こういう基金を皆さんが拠出してきて作りました。協力していただきたいことがあるので、繋ぎをやってください。被災の酷かった地域の高校生を修学旅行で愛媛に招きたい。この基金で全部お世話します。」と、こういう話を持ち掛けたところ、その知事から教育委員会に話が行き、教育委員会同士で話を詰めてもらって、現在6校が、今年愛媛県に来ることになりました。問い合わせ中が3校ありますので、今のところ9校が対象として入っています。岩手県の大槌町の高校、宮城県石巻市の水産高校、福島県の南相馬市の高校が2校、浪江町、双葉町の高校生が、この基金で、秋から3月にかけて修学旅行で来ます。その時に、東・中・南予の出来るだけバランスを取って、この高校が来た時には、東予の高校が交流してみてくれと、或いはイベントを企画するのもよし。そういう高校生同士の交流が実施出来たらなど、それによって、愛媛県の高校生達も、人を助けること、或いは支えるということが、いかに価値があることかということを経験出来るのではないかと考えています。愛媛県ならではの、皆が笑顔になるような、そんな支援事業に繋げていくことが出来たらと思っています。

終わりに

最後に真珠の話です。いつも上着の襟に真珠を付けています。でも、これだけでは面白くない。アイデアですね。真珠の上にこのようなアクセサリを付けている。これは豚なんです。「豚に真珠」。じゃあこの豚はなんだというと「愛媛甘とろ豚」なんです。こちらは携帯のストラップ。ここにも真珠がある。これが別バージョンの豚なんです。買って来たんですが、これがなかなか高価な品物で、本真珠ですから80万円・・・、すると思ったら大間違いで2,800円でした。そんなちょっとしたアイデアで、思わぬ価値が生まれてくるという一つの例として普段から付けているのですが、是非久万高原町でも、久万高原町ならではの農林水産物、或いは林業、それから、地芳トンネル等の開通によって開かれた高知・梶原との連携、また、これからは自然回帰型が強くなってきますから、自転車ということ、これも一つの久万高原町の切り札になっていくのではないかなと。世界には自転車愛好者というのが山程いるのです。そして、この前、ある自転車の関係者と話していたら、愛媛県内で、アマチュア自転車愛好者が非常に注目しているのが、3箇所あって、1箇所がしまなみ海道、もう1箇所が佐田岬半島、そして何と石鎚スカイラインです。余りにも身近にあるとその価値が分からないのかもしれないですが、そんな風に見つめている人達がいるということも、やがて一つの大きな力になる可能性があるのではないかと思います。